

日本放射線腫瘍学会第 27 回学術大会 印象記

有賀 隆

Aruga Takashi

日本放射線腫瘍学会（JASTRO）は 2014 年 12 月 11 日（木）～13 日（土）、パシフィコ横浜で北里大学医学部放射線科学「放射線腫瘍学」主任教授 早川和重先生を大会長として開催された。日本医学放射線学会総会が毎年 4 月にパシフィコ横浜で開催されるのに対して JASTRO は様々な都市で開催されていたが、今回は日医放と同じ会場である。また開催時期は 10～11 月となるが多かったのが、会場確保の都合が年末近くの開催となった。

テーマは「臨床腫瘍学に基づく放射線療法の標準化から個別最適化へ」とされた。様々な臨床データや生物学的知見が集積され、万人へ標準的な治療を行うことから個人に最適化した治療方法を提供する段階に進もうという学会の意志と捉えた。その進む方向に間違いはないと思いつつも、世の中で“オーダーメイド治療”という言葉が過度にもてはやされていると危惧を感じることも最近多く、複雑に感じてしまう部分があった。

この十年ほどは、放射線治療分野は“バブル”というべき状態と感じていた。前立腺癌や乳癌の照射件数増、ほかにも同時化学放射線療法の適応拡大などで照射患者は著しく増加してきている。さらに、新型の治療装置やモダリティも次々と登場してきた。ガイドラインや充実した日本語テキストやマニュアルの発行、教育・研修環境の整備もなされていき放射線治療分野が急速に広まっていることが実感された。こういったことを望ましく感じる反面、機械と

技術に踊らされているという危惧感もぬぐえなかった。マニュアル・ガイドラインの整備によって標準的治療を重視する若い世代が育っていることは進歩なのだろうが、ガイドラインの行間を読み取る経験を持たずに臨床応用する姿勢には、思考停止との違いを説明しきれず“標準化”の意義について考えこんでしまうこともあった。今回の“個別化”への流れはかつての経験に基づく個別化ではなく医学的な知見に基づく正当な進展であると思われるが、どのような個別化が行われていくのか興味深いと同時に不安を感じるものがあった。また、昨年ぐらゐから放射線治療バブルは収束してきている印象で、全体を見渡すほどの見識を持たない身には今後の流れに不安を感じる最近でもある。テーマはその文言だけでしかないが色々なことが連想されてしまった。

さて、このような筆者の感覚は別としてプログラムには以前とは異なる新しい試みや実臨床を志向したシンポジウムが組まれており、従来の臨床成績・症例提示・新規装置を用いた治療法の発表等のほかに、治療法の選択や有害事象対策などの日常遭遇する切実な問題に対する分析、対応といった臨床家の立場からは“痒いところに手が届く”といった感じの発表も多数認められた。“JASTRO は確実に進化している”と感じられ、学会開催の関係者の方々の努力に頭が下がる思いであった。

新しい試みとしては IT の手法がますます取り入れられていた。数年前からスマートフォン

等のアプリでプログラムの閲覧が可能になってきたが、今回はシンポジウムの発表中に横のスクリーンに会場内からの SNS による投稿が表示されるようになっていた。会場内の PC やスマートフォンを持っている人からは演者の話に応じて様々な投稿がされたり、司会者が会場からのアンケートを集計したりと、なかなか interactive な学会になってきたことに時代の流れを感じた。

Presidential Educational Session では「分子イメージング」のテーマで井上登美夫先生（横浜市立大学）、井上優介先生（北里大学）の講演があった。PET-CT は放射線治療に不可欠なモダリティとなると考えているが、まだ使用可能な施設は少ない。核医学と放射線治療はいまだ近くて遠い関係のように思われる。この関係が更に親密になってくれば臨床的恩恵は大きなものとなるに違いない。日本全国でそのような時代があと数年ほどでやってくると期待したい。

また、今回は機器展示でも工夫があった。大会長の要望と伺っているが、VARIAN, ELEKTA, ACCURAY といった主要治療機器メーカーがリニアックの実機を展示しており、（ビームが出るわけではないが）ガントリーヘッドや寝台を実際に動かしてデモンストレーションをしていた（写真）。日常放射線治療室内でみるリニアックには強く圧迫感を感じるのに、巨大な展示会場の中では意外にも小じんまりと感じられた。

筆者の好みで恐縮だが、印象のある演題としてはシンポジウム「有害事象をいかに防止するか」で「放射線肺炎で死なせないために」、「頭頸部がん放射線治療に伴う有害事象とその対策」、「悪性神経膠腫の分子生物学的特徴とその臨床応用：現状と今後の治療戦略」といった演題が挙げられる。特に放射線肺炎のシンポジウムについては、放射線治療医にとって最大の問題の 1 つともいえる致死放射線肺炎への対応を講じるに当たって納得できる指標がようやくできてきたと感じ、ここ数年で最も有難い話で



写真 機器展示会場では放射線治療装置の実機でデモンストレーションが行われていた

あった。

華々しい発表とは別に「少数常勤治療医サポートプロジェクト」も学会サポートで開催されていた。多数の治療医による高精度治療が行われている施設がある一方、1 人医長や常勤治療医がいない施設もまだ多数残っている（筆者もその 1 人である）。時間の都合で残念ながら参加できなかったが、今まで“1 人医長”という言葉が頻用されていたところから“少数常勤治療医”となったこと、チーム医療を掲げて現実的な打開を図っているところに力強さと多少の進展を感じた。ただ、数字的に放射線治療医が年々増加してはいるものの実感として充足感は皆無である。

今大会でも精力的な発表が見られるのは従来通りだが臨床の積み重ねからの反省や対策、看護領域からの発表など実臨床に基づいた地に足がついた検討が以前より目につくようになった気がする。

今大会は全体としてとても印象的で例年になく収穫があったと感じた。円熟さを感じたのは学会の新たな変化が始まる微なのもかもしれない。大会テーマの“標準化から個別化”は端緒が開けたばかりである。次期大会はどのように開催されるだろうか？ 今年は 11 月に高崎市で開催予定である。

（船橋市立医療センター 放射線治療科）